
俺と彼女の戦国記

三二一 涼

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女の戦国記

【Zコード】

Z5891D

【作者名】

三一 澄

【あらすじ】

異世界につれてこられた彼氏と彼女。同じ世界で別々の国を導くことになる。当然のように戸惑う彼氏、瞬く間に国を纏め上げる彼女。二人は元の世界に帰ることができるのか?少年少女が戦場を駆ける!

プロローグ デート 転落

彼女、春原希美は美人である。100人が100人……は、まいに過ぎだとしても、90人くらいは賛同してくれるだろう。暗いなどとほざく愚か者も微々いるが、勘違いも甚だしい。やつらには彼女の常人とは違う神々しさがわからないのだ。あれはクールと言うべきであって、暗いなどという評価は愚かしいにも程がある。たしかにあまり喋らないし、なかなかわらってくれないし、デートの時くらいうつと楽しそうにしてくれてもいいと思うんだけどなあ……

「ねえ？」

「え？」

しまった、俺としたことがデート中に彼女の言葉を聞き逃すなんて……ただでさえ希少な言葉なのに……！

「『めんボーッとしてた……何？』

「せつかくだから、参拝してかない？……合格祈願とか

彼女の目をあつてみると、少し寂れた感のある神社があつた。

「あ、うん。そうだね。せつかくだし、行ってみようか！」

そう言って俺たちは神社へ向かった。

俺はこの先何度もこのときを振り返っては後悔する。
嗚呼！なんで俺はこのとき断らなかつたんだ！

まあ、彼女の提案を断れるなんてなかつたんだだけじね。

「なあ……今度ピクニックいかない？」

なんてことを彼女に言つたのは先週の金曜のことである。正直、女の子は疲れるハイキングなんかには興味をしめさないかもしないと思っていた。でも、こここのところ映画や海などの定番系はほとんど制覇してしまったので、いつも困つてたのだ。もちろん俺自身としては、彼女といれるならどこでも構わないのだが。

だから、

「…………いこよ」

と彼女が言つた瞬間奇声をあげてガツツポーズをした俺を誰が責められるだろ？！誰であろうと責められるはずがないっ！！

そして翌週の土曜日、揚々とハイキングに行き、それなりの景色と空氣と美しい彼女を堪能して帰り道、その神社にさしかかったわけである。

それにも結構歩いたのに全然平氣そつだ。そんなスポーティーなどこらなんかも好きなのだが。

とりあえずも御参りをすませ（俺の世界が平和でありますよつこ）あ帰るつかと彼女の手を握ろうとした瞬間、突然足もとに漆黒の

闇が広がった。

「なあつー?」

落とし穴!?と叫ぶ間もなく俺はその穴に落ちた。彼女と一緒に。

「つーー。」

彼女が必死にこしきに手を伸ばしてくる。俺も必至に手を伸ばすが、届かない。

……希美のあんな必死な顔なんて初めて見るな……

なんて、てんで場違いなことを思いながら、俺は漆黒の闇にのみ込まれていった……

……

そして結論から言えば、神様は俺の願い事なんか完璧に無視した。

プロローグ テート 転落（後書き）

初めまして。今日から異世界戦記物を書いていきます。
稚拙な文で読みにくいくらいもあると思いますが、よろしくお願い
します。

一、彼の戦国記

「んのあつー」

落とし穴の下に叩きつけられたと思つて踏ん張つたので変な声が出たのだが、意外と柔らかい物の上に落ちたらしく、ほとんど衝撃は無かつた……というか全くない……

「…………！」

目を開けて周囲を確信したとたん、目が点になる。
なんだこれ？

目の前には見たこともない後景……情景と言つてもいいかも知れない……が広がっていた。明らかに日本人ではない、歐米的な、しかも大人たちが、こちらを向いて傳いでいる。……と、そこで初めて自分が段上の大きな椅子に座っているのに気付いた。

わけもわからず呆けていると、手前の左隅の男が立ち上がりつつちへ來た。

「よつこじセアトランン帝国ぐ。まずは神祇の召喚と、この状況説明を
させさせていただきますので、いきなり！」

と語りつづたと歩き出す。

「へ？あ、ちよっと……」

俺も慌てて後を追つ。頭の中ははてなでこいつぱいである。……「こ
つ日本語しゃべつてる……とか。

階段を嫌になるほどのぼって（ただでさえピクニック帰りで疲れて
いたのに）、もう座りたい……と思つたところで、やつと田舎地に
着いたらしく。

「……」

といつて通されたのは、学校の教室一つ分くらいある部屋だつた。
塔のてっぺん付近にある部屋なのに窓は一つもなく、燭も見当たら
ない、にもかかわらず部屋が明るいのは、部屋の真ん中に火の玉が
浮かんでいるからだ。

つて浮いてる！？
なんといつホラー……

「あの炎に手をかざして下せー」

「はあ……」

といつあえず言われたように炎に近づく。とはいつてもホラーチック
な火の玉である、やう簡単に近づけるものではない。

と、躊躇していると、ソリまで案内してきた男が近づいてきて、

「……失礼します」

「へーー？」

俺の背中を火の玉めがけてポンと押した。

「ええーー？」

俺は完全にバランスを崩して火の玉に倒れ込んだ。

彼女の戦記1

彼の手を…掴めなかつた……

ふわりと地面に降りる感触を味わつてから、希美は目を開いた。

何人もの人間が目の前で伏礼している。

しかし、希美の顔に驚きのよつた表情はいつこうに表れない。しばらくしてうかべたその表情は、運命に呆れるものか懐古の念か、希美自身にもわからなかつたが、どちらにしろ、そこに一抹の淋しさが交じつっていたことだけは、希美にもわかつた。

「神祇召喚と、状況説明をさせていただきますので……？」

近づいてきた力士のよつた体格の男が喋るのを遮る。

「まずこの国の名前は？」

「…………は、はあ、我が國ですが……」

「じゃあこの世界の地図を持つてきて」

「は……はい！」

男は驚きの目をこぢらに向けながらも、近くにいた下男を呼んで地図を取りに行かせた。

伏礼していた者たちが驚きと困惑の目を向ける。それも当然、今までこんな事例は聞いたことがなかつたし、実際に無かつただろう。

そんな視線をまるで無視してしばらく待つていると下男が地図を持つてきた。

地図にはほぼ正方形の大陸が描かれてあり、地名らしい漢字のようではあるが見たこともない文字が書かれている。しかし希美にはその文字を読むことができたし、それに対して疑問を持つようなこともない。

地図には五つの国が描かれていて、義国はその大陸の左下……南西に位置していた。面積は大陸全体の4分の1……いや、5分の1といったところ。大陸の中心部分に義国のある3分の1くらいの国、崑崙^{こんろん}があり、中心よりも左下によつているため、4分の1には達しないようだ。

大きさは大陸で二番目。一番大きいのは大陸の半分、東側全てを覆うアトラン帝国という国だ。東海岸全て、南海岸の半分、北海岸の3分の2を覆う圧倒的な大きさである。

そして義国^{げなん}の北側には海岸を持たないベルキという国が、そして北海岸の3分の1と西海岸のほとんどを覆う、細長い……あの世界でいえば、南米のチリのような……ジュンガル国があつた。

「他国との関係は？」

「はい、……」

最初に話しかけてきた力士のような男の話によると、大国アトラン帝国との関係は最悪だが、現在は停戦条約を結んでいるという。

中央付近にある鹿瀬とは、比較的仲が良いらしい。義国^{じゆくに}の都である康熙^{こうこう}と、鹿瀬の都である嵩山^{すうさん}が近すぎて、戦つにはリスクがありすぎるからかもしれない。

そして北の一国、ベルキヒジョンガルは軍事同盟を結んで義国と敵対している。ベルキ一国相手なら義国が優位だったが、海軍大国のジョンガルと手を結ばれたことによりて、特に海岸部分で、最近はかなり圧迫されているという。そのためベルキ戦に戦力が集中できず、戦線を維持するに留まっている。

「あの、神祇は……」

地図から顔をあげると、力士男が不安そうな顔で尋ねてきた。

希美は右手で胸のあたりを撫で、

「……こつてみよつかしら」

彼女の戦記1（後書き）

おくれてごめんなさい！

春休みで実家に帰っていたので、執筆も投稿もできませんでした；

……まあ読んでる人殆んどいないんすけどね；

今日からまた頑張つていいくので、よろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5891d/>

俺と彼女の戦国記

2010年10月8日21時30分発行